

フランツ・ボルケナウ『封建的世界像から市民的世界像へ』（水田 洋・花田圭介・矢崎光圀・栗本 勤・竹内良知・元浜清海・山田宗睦・田中 浩・菅原 仰=訳、みすず書房、1965年9月15日初版）、全741頁+xxxiii（引用文献・人名索引）

DER ÜBERGANG VOM FEUDALEN ZUM

BÜRGERLICHEN WELTBILD -Studien zur Geschichte der Philosophie der Manufacturperio Von Franz Borkenau -Schriften des Instituts für Sozialforschung Vierter Band herausgegeben von Max Horkheimer, Félix Alcan, Paris, 1934

著者（フランツ・ボルケナウ）の序文（本書、pp.14-22）

■デカルトが基礎をすえたような、認識論的傾向をもつ近代哲学は、近代の数学的—機械論的世界像の基礎である。新しい数学および物理学とともに成立した。この二つの思想群が、内的に連関しあって出現したものであることは、明白である。ところが、この連関の歴史的把握は、つぎの事情によってさまたげられてきた。すなわち、新しい自然科学は一少なくとも最近の数十年にいたるまでは—ひろく一般にみとめられた方法とおびたしい量のみとみとめられた成果とを意のままに支配し、この自然科学の発展はつねに同一方向に前進していく経験の集積という外観を呈し、また自然科学的認識は無条件の客観的真理であるとの主張に成功していたのに、他方、哲学においては、それとは逆に、どの命題を一つとっても確固たる妥当性をもたないのである。こうして、他の文化的諸時代とはまったく反対に、近代においては、世界と人生にはついでにの哲学的な総括的な見解は、主観性の一領域であり、精密自然科学が客観性の領域としてそれに対立するものとみられる。したがって、自然科学の歴史的発展については、人間精神が神学の桎梏から解放されるや、ただちに自然の「自然的」考察にむかったという以外には、別に語ることもさしてないように思われた。これにたいして、近代哲学の成立は、多種多様な解釈に委ねられたままであった。これらの解釈は、心理学的・類型学的考察にかんして部分的には豊富にされたものの、ほとんどつねにたんなる思考史の枠内にとどまっていた。事実、近代哲学は、その母胎たる世界像、すなわちそれが基礎づけもし、かつそれにたして戦いもしたところの精密自然科学の世界像から切りはなしては理解できないのである。その連関を回復しようとする、おそらくは最初の試みをくわだてたのは、ディルタイである。ところが、かれにとって、近代的世界像は諸科学の「自然的体系」であるので、この世界像をつくりだした哲学の発展もまた、かれには、要するには自然の光（*lumen naturale*）の教説による、神学的桎梏の粉碎以外の何ものでもありえない。ここでは、諸体系間の和解しがたい戦いをひきおこす諸矛盾はきえうせ、実際には鋭く対立する諸方向や、たがいにはっきりと区別される諸時期が、「人間精神の解放」という単調な薄明のもとにぼやけてしまう。

■エルンスト・カッシーラーは、その『認識の問題』において、近代哲学と新しい自然科学に共通な根本的諸カテゴリーの発展を、純記述的に叙述するという、きわめてみのり豊かな試みをくわだてた。かれの問題設定は、かれみずからのまもった限界をこえる広さをもっている。近代哲学本来の業績が近代科学の確立にあり、しかもこの近代科学の根本をなす諸形式——自然法則の概念、動力因の遍在、自然の合則性の数学的把握——が恒久の「自然的な」思考形式ではなく、一時的な歴史的に制約された思考形式であるとすれば、どうしてもこれらの特殊な思考形式を成立させるにいたった特殊な歴史的諸条件をたずねざるをえない。こうした試みは、わずかに二、三〇年前でも、われわれの知識のうちのもっとも確実なものにたいする攻撃と思われたことだろう。だが、物理学の最近の発展によって近代自然科学の基礎的な諸カテゴリーが疑われだし、こうしてそれらのカテゴリーの歴史的—一時性が明らかにされて以来というものは、もはやそのように解される余地は存しない。とすれば、十七世紀に作りだされた、精密自然科学にもとづく世界像は、もはや客観的に実在する外界——とらわれぬ眼にはまさに近代人の見るとおりに見えるだろうと思われる外界——の自然的な模写であるとは考えられない。その世界像はむしろ、ある歴史的—

社会的諸条件から、すなわち、十七世紀から今日まで、資本主義的生産様式の支配によって規定された歴史的時期において、人間としてまさにこれらのカテゴリーを世界における自己の行動の指針として作りあげさせたところの、そうした歴史的—社会的諸条件からこそ、説明されねばならない。だからこそこれらのカテゴリーは、人間「にとって」けっして自然的なものではない。というのは、神学的になんら束縛されていなかった古典古代を含めて従前のどの時代も、そのようなカテゴリーを形成しえなかったのである。かようにして、他のばあいとおなじくここにもまた、歴史的観点を徹底的におしすすめるなら、思考の発展の説明を社会的存在の変遷によっておこなう立場へといきつく。

■それゆえ、当時の哲学と社会的闘争との連関を、具体的に、実際に即して、学派から学派へと発展していくことが肝要であった。そのさいわたしは、種類も価値もひじょうに異なった示唆をうけたのであるが、それらは、とりわけオットー・バウアーやデボーリンがあたえてくれたところのもの、またなによりもジェルジ・ルカーチが事物化 (Verdinglichung) にかんするその深い研究によってあたえてくれたものである。もっとも、これらの著者たちの見解を、一々ここで議論するわけにはいかない。わたしのももとの計画は、ブルジョア哲学の三つの根本形式、合理主義、感覚主義、批判主義—歴史主義を、ブルジョアジーの三つの相異なる発展段階における、同一問題のさまざまな現れ方として、しめすことにあった。だがやがて、こうした問題設定の仕方がやはりブルジョア的世界像の自然性という幻想にとわれていることがわかった。というのは、感覚主義と批判主義とは、すでに、客観的真理とされていた精密自然科学の世界像の、たんなる解釈にすぎないのに、これに反して、合理主義は、その真理性に異論をとる以前の思想形式と戦いながら、その世界像をつくりだしたものだからである。のちの発展においてはたんに間接的にしかおこなわれていない哲学と自然科学と統一が、この最初の局面においてはなお直接的にあたえられている。それゆえ、さしあたってこの局面においてのみ、この連関を研究することができた。したがって、したがって自然科学にかんしても、わたしは、合理主義とむすびついていたその変革の第一の時期、すなわち、機械論的な自然学説だけしか考慮しえないということになった。それゆえ、一七世紀の数学的—機械論的世界像の根本的カテゴリーの成立を、当時の社会的闘争から実際に即して叙述するということが、これが課題となったのである。

■ここまではっきりわかったことは、わたしは、その課題の龐大さと、その解決のために現に用いる手段の貧弱さとに、気おくれせんばかりであった。近代自然科学の成立は、近代世界像の成立の、おそらくもっとも重要な部分をなしている。ところが、それを叙述するための資料は、嘆かわしい状態にある。実験的方法の成立というような、基礎的な諸問題が、ほとんどまったく手をつけられていない。現存するものは、ほとんどもっぱら過去の世代の科学者たちによって提供されたものばかりであり、それゆえつねに、近代自然科学史は客観的真理そのものの発見の歴史であるという前提のもとに立っている。(この立場は、ごく最近、近代数学の成立にかんするウィーライトナーの、深い歴史的な理解に満ちた諸著によって克服されている)。資料がこうした事情にあるため、わたしはほとんど、自然科学の領域においては門外漢として、きわめて控えめにすることをつとめねばならなかった。しかし、それにもましてなおおこなったことは、新しい科学の、新しい社会や新しい社会学説との連関にかんする資料の状態である。イギリス、オランダ、フランスにおける十七世紀の階級闘争にかんして、われわれが知っているところは、それら闘争の尖鋭的な革命性にもかかわらず、まさに至福一般的なことにすぎない。そこでわたしにできたことといえば、これら一般的な知識に甘んじる以外になかった、あるいはむしろ不安にかられながらもその不完全な史料でがまんする以外にしようがなかったといつてよい。それにくらべて社会学説史は、量からいっても、また大部分は質的にも、もっとよく開拓されている。ここでは資料がよくあつめられており、また部分的には透徹した理論的総括がなされていた。たとえば、ギールケの『アルトジウス』、シュミット・ドロティチュの『独裁』、トレルチの『社会学説』、M・ウェーバーの『プロテスタンティズム』やまたマイネッケの『国家理性』においてそうである。ところがここにおいてもまた、一つの領域から他の領域への橋渡しは、ほとんどないにひとしかった。自然法と政治的諸党派との連関というようなきわめて手近な問題にしても、少数の自然法学者たちだけにとって問題となっているにすぎず、そこでこの問題は、とりわけ、アルトジウスの『政治学』の、原典批判的な取り扱いにもとづいて、

あきらかにされねばならなかった。たとえ十七世紀の政治も自然法も、それぞれ別個には充分研究されているとしても、それはやむをえなかった。ここでは、たしかに研究の技術上の必要だけから生じたとはいえない学說的細分化の、不幸な影響が、いたるところに現れている。ところで、一方神学的、道徳的、政治的諸体系と、他方自然科学との、両者の連関に目をむけるならば、これについてはごく最近にいたるまでなんの取り扱いもところみられなかったことを、すぐにも確認せざるをえない。近ごろあらわれた J・J・ザウターの『自然法の哲学的基礎』にかんするすぐれた著書が、やっとはじめて若干の洞察をあたえてくれる状態である。だが、まさにこの連関とそれ変革こそが、われわれの問題の理解にとっては、決定的なのである。そこで、わたしとしては、なにかが見つかろうとの漠然たる希望をもって、さしあたり見通しのかかぬまったく未整理の原資料のなかへ、みずからはいりこんでいく以外にはしようがなかった。こうした勇気がむくいられていればよいと思う。そして、精密自然科学が道徳思想や社会思想の変転と、またそれを介して社会生活と、むすびついているその結びつきの要点のうち、その一つでもわたしが見つけだすことに成功していればよいと思う。こうした発見に少なからず役立ったのは、フランスのすぐれた専門的研究、とりわけ近代哲学の神学的基礎をきわめてすっきりと明らかにした A・コワレの著書『デカルトとスコラ学』であった。

■かようにして、わたしの問題設定と、それを遂行するための資料との、相互作用から、本書は成立したのである。それは、一つを中心問題から出発して、これを多方面にわたって追及したものであるが、いかなる意味でも体系的完璧さを主張するものではない。内容からいえば、近世初頭の人間学や神学と、数学的—機械論的自然科学や合理主義との、連関を一貫して原典にもとづいて研究したものであって、これは、一九六三〇—一九六〇年の偉大な哲学的諸体系に即して、展開される、ブルジョア世界観の類型学へと通じる結果となった。そのさいわたしは、ガッサンディの人物と体系との、まったくはつきしない役割を、新しい光のうちにしめそうとつとめ、この目的のために、いままで事実上知られていなかったガッサンディの名著『哲学集成』を手ひろく引用して示しておいた。いったんわかってみれば、ガッサンディは、理解するのに困難ではなかった。デカルトとパスカルについては、事情は逆であった。かれらはよく知られているくせに、かならずしも正しい連関のなかにおかれてはいなかったように思われる。そこでかれらの言葉は、わたしの叙述において、同様に手ひろく引かれている。デカルトの生涯と体系とが、立ち入った考察にたいしてつねになげかける、あの謎を、わたしは、かれの生涯の前半に一つの新しい解釈をほどこすことによって解明しようとしてつとめた。これに反して、ホブスは、よく知られているし、また大体正しく理解されているように思う。だからこれについては一本書を不当に尠大なものにしないためにも一広汎な資料を提示することにはかかずらわれないで、ただ全体の連関のなかに位置づけるために必要なものだけを、あげておいた。ホブスにさかのぼる、国家学説の哲学的取り扱い、近代世界像のその他の諸部分にたいするその連関を、それ自身で非常に明らかにしめしている。そこでこの点についても、わたしは、周知の資料の簡潔な叙述によって、この思想家群の連関をたどることで満足できたのであって、ただこの連関がはつきりしないだに思われたところ、すなわち、アルトジウスにかんしてだけ、補足しておいた。技術の影響や自然科学の個々の基礎概念の発展、さらに最後に、だが最小にではなく一当時の社会闘争は、ただ主要思想の理解に必要なかぎりにおいてのみ、とりあげられた。社会思想と自然像との結合の前史は、序論的にそのスケッチをしめしておいた。この資料はたしかに断然新しいものではあるが、そのスケッチがたんなる計画案とみなされて、できるだけ多くの個別研究をうながすことになれば、その目的はもっともよく達せられたことになると思う。

■わたしの成果についておこりうべき誤解にたいして、あらかじめことわっておきたい。中世のカトリック、とくに、トーマス・アクイナスによるその解釈は、近代哲学の創始者たちと対照をなすものとしてたえずわたしの参考となった。そこにはまだ、近代思想にたいして幾世紀にもわたる解きがたい問題を課した二律背反が、存在しておらず、とりわけ、私見によれば近代哲学の問題の核心である、人間生活における衝動と規範との二律背反が存在していない。したがって、これらとくらべれば、中世は「調和」しているようにも見える。だが、そうだからといって、そこから中世的封建社会秩序の讚美も、また中世のカトリック哲学の讚美もゆるされるわけではない。これは

自明なことであるが、とくに明言しておきたい。スコラ学の方が、問題の実践的ならびに理論的諸解決について、の大きな統一性をたもっていられたのは、のちの資本主義社会のもろもろの二律背反と苦闘することによってまさに獲得され、そしてそれなしにはこんにちわれわれが生きることもできないであろうと思われる。自然や社会にかんするあの認識のすべてをもなかつたことによるのである。この哲学の母胎である封建社会秩序は、人間と自然のあいだある一定の関係に、こんにちではもはや存在しない生産力の一定の状態に、むすびついているのであって、それゆえその哲学の讚美は、実際にはその再興には役立ちえず、いつもただなにか他のことに役立つにすぎない。トマス主義蘇生の試みは、まったく、真のトマス主義の実際の意味からはへだたった結果しかもちえない。このことは、社会理論の領域に、もっともはっきりしめされている。ここでは、トマスとの一致を無上に尊しとする、もっとも厳格なカトリック思想家たちがまさに、この百年というもの実際には、神の定めたもうた官憲というルターの教説と、なんら区別するところをなくしているのである。ある一定の社会組織とそれに応じた思考形式が、過去の生活関係に比較的順調に適応したからといって、それらの社会組織や思考様式を全然異なった諸関係のもとにふたたびとりいれると、過去の時代の素朴な調和からぬけ出てしまったこの新時代の思考や生活のうちにふくまれている諸矛盾の克服に役立つ、ということにはならない。

■構造的要素に力点を置いた本書の叙述では、歴史的に描写する叙述の仕方がどうしてもとりにくかったから、助言として最後にひとこと、わたしの眼に映じたままの十七世紀の一般的性格について述べておきたい。それは人類史上もっとも陰惨な時代の一つである、とわたしはあえて言いたい。まだ宗教が大多数の人心を確実に支配している。しかもこの宗教は、その柔らかな宥和的な相貌をかなぐりすてて、ただおそろしい相貌のみをとどめていた。ピューリタンやヤンセン派の隠された神 (Deus absconditus) のように、かくも全生活に浸透する恐怖を流布した神は、かつてなかったであろう。ジェズイットやリベルタンたちが、この軛をゆるめる。しかしかれらがその軛に対置するのは、なんらよろこばしい信仰ではなく、たんに放逸な利己主義の無拘束な自由の領域である。すぎさった時代の同業組合的結合の親密さは、うしなわれてしまった。中世の拘束された生活秩序から、ただその圧迫だけがのこされた。ルネサンスの巨人たちがほめたたえた美の国は、埋没してしまった。ただ神秘的な地上のものならぬ一つの光が、レンブラントの絵のなかで、暗闇のただなかに救いを模索する信仰を告げている。シェイクスピアがなおたたえることのできた、英雄的信条の誇らしげな自尊心は、色あせてしまった。ラシーヌにとって、激情とは、二度と音取返しつかない呪いの深淵へとみちびくものでしかない。死さえもが、資料のしめすところによれば、この恐ろしい世紀にあっては、他のいかなる時代よりも過酷だったようである。死ぬことは、まだ、人類がむかえるべき明るい日にたいする信仰によってやわらげられていなかったし、またもはや、一つの自己完結した生活圏に当然おこるべき自明の出来事として安心できるものではなかった。啓蒙の光はなお地獄の恐怖を和らげておらず、かといってまた、素朴な信仰の時代の甘未さはうしなわれて、もはや、そこから樂園の微光がさしこんでくることも期待できない。このおそろべき時代の地上の地獄のなかで、あの鋼鉄のように堅固な個々の思想家がうまれた。かれらはその熱烈さにおいて、ピューリタンの「信心家 (godly)」にもおとらず、生きることがもちうる意味をひろく探求したのである。

ウィーン 一九三二年九月

フランツ・ボルケナ (Franz Borkenau)

参考文献

[フランツ・ボルケナウ - Wikipedia](#)

[Franz Borkenau - Wikipedia](#)